

# 道真の詩「秋夜、宿弘文院」「春詞二首」の二詩をめぐって

—道真の詩に投影されている『白氏文集』からの摂取態度の一考察(その八)—

焼山廣志

道真四十一歳の時のものとされる。

今回取り挙げる菅原道真の詩は、いずれも先学より

『白氏文集』(以下、白詩と略す)からの投影関係が指摘されている所である。先学に導かれつつ、その白詩からの摂取態度に若干の考慮する余地が残っていると思われるので、以下一首毎に考察をしてみる。

## 二

まず『菅原文草』巻二に所載の「秋夜、宿弘文院」を取り挙げる。この詩は川口久雄氏によれば(岩波古典文学大系『菅家文草、菅家後集』解説八十七頁)仁和元年、

\*151 秋夜、宿弘文院

信脚涼風得自由 脚に信せて涼しき風に自由を得たり

弘文院裏小池頭 弘文院の裏、小さき池の頭

紀司馬以他門去 紀司馬は、他門なるを以て去る

藤少府因入室留 藤少府は、入室に因りて留る

梁上鷄遲知未曉 梁上の鷄、遅くして、未だ曉けざることを知る

枕邊螢急欲深秋 枕邊の螢、急にして、秋深まらんとす

非無弊宅安眠臥 弊宅の、眠臥、安らかなること無きに非されども

乘輿來時物外遊 輿に乘りて來りしときより、物外に遊ぶ

\*作品番号は岩波古典文学大系本に従う。本文、訓み

は概ね岩波古典文学大系本に従う。

※岩波古典文学大系本では「興<sup>(きよう)</sup>」とあるが、内閣文庫本・松平文庫本・蓬左文庫本により「興<sup>きよう</sup>」に改めた。

この道真の詩に投影されている白詩の指摘は、既に金子彦二郎氏により次のようになされている。(『平安時代文学と白氏文集―道真の文学研究篇第二冊―』三三四頁)

『菅家文庫』(15)「秋夜、宿弘文院」 梁上露・通知未曉 <sup>△△</sup> 枕邊 <sup>△△</sup> 夢急欲 <sup>△△</sup> 深秋 <sup>△△</sup>	『白氏文集』(0742)「晚秋夜」
(・同語句 △は類似語句を示す)	寒鴻飛急 <sup>△△</sup> 賞秋 <sup>△△</sup> 尽 <sup>△△</sup> 鄰 <sup>△△</sup> 鷄 <sup>△△</sup> 鳴 <sup>△△</sup> 通知夜永 <sup>△△</sup>

そこでこの白詩「晚秋夜」を挙げてみる。

\* 0742 晚秋夜

碧空溶溶月華靜 碧空<sup>△△</sup> 溶溶<sup>△△</sup> として 月華靜かなり

月裏愁人弔孤影 月裏<sup>△△</sup> 愁人<sup>△△</sup> 孤影<sup>△△</sup> を弔<sup>△△</sup>ふ

花開殘菊傍疎籬 花開きて 殘菊 疎籬に傍ひ  
葉下衰桐落寒井 葉下ちて 衰桐 寒井に落つ  
塞鴻飛急覺秋盡 塞鴻<sup>△△</sup> 飛急<sup>△△</sup> として 秋の盡くるを覺え  
鄰鷄鳴遲知夜永 鄰鷄<sup>△△</sup> 鳴くこと遅くして 夜の永きを知る  
凝情不語空所思 情を凝らして語らず 空だ思ふ所あれば  
風吹白露衣裳冷 風 白露を吹いて 衣裳冷かなり  
風吹白露衣裳冷 風 白露を吹いて 衣裳冷かなり

\*作品番号・本文・訓みともに新釈漢文大系『白氏文集 三』に従う。

この詩の意は「広くひろがる夜空高く月光が静かに照らし、月明りの中に愁人が寂しく我が孤影をいとおしんでいる。しなびた菊が花弁を開いたまま疎い籬に沿って続き、萎れた梧桐の葉がひらひらとものわびしい井戸に落ちる。北来の雁がせわしく飛んで秋の終りを感じ、隣家の雞が朝遅く鳴いて秋の夜長を知る。物言わずじっと心を集中してひたすら物思いにふけっていると、秋風が白露を吹いて、着物がひんやりしてくる」(新釈漢文大系『白氏文集三』一三九頁より抜粋)となる。

この白詩と道真の詩との比較をしてみると金子氏の指

摘されているように、白詩の六句目「鄰鷄鳴遲知夜永」が道真の詩では五句目に「梁上鷄遲知未曉」としてほぼ忠実に投影されている。同じく白詩の五句目「塞鴻飛急覽秋盡」は、先の白詩の六句目と対になっている句で、これを道真は六句目で「枕邊葦急欲深秋」として五句目と対にして発想を白詩より学んでみると大過ないと思う。つまり、「秋の深まり終わりゆくこと」を白詩では「塞鴻」に見出したのに対し、道真は「葦の鳴き声」に見出している句作りである。この両詩の二句に投影関係が指摘できることは明らかである。更に発想面での類似を挙げるならば、白詩の七、八句「凝情不語空所思／風吹白露衣裳冷」の句意を道真が一、二句で「信脚涼風得自由／弘文院裏小池頭」の句作りに生かしているのではないかと考えられる。つまり、白詩に言う「凝情」を道真は「信脚」と替え、「風吹白露衣裳冷」の白詩の語句を道真は「涼風得自由」と表現しているのではないかと推測できるのである。

ここで道真の詩の六句目に再度視点を移してみる。発想的には白詩に拠っていることは先に述べた通りである

が、「枕邊の葦」の詩語の使い方に注目してみたいのである。

先学より指摘されて久しくなる『藝文類聚』の蟲豸部の「蟋蟀」を見ると（注一）

爾雅曰、蟋蟀、葦也（中略）禮記曰、季夏之月蟋蟀居壁（中略）毛詩曰、蟋蟀在堂、歲聿云暮、詩義疏曰、蟋蟀以蝗而小、正黒、目有光澤、如漆、有角翅。

「葦」は『爾雅』では「蟋蟀」のことと説明されており、「蟋蟀」とは詩義疏によると「蟋蟀は蝗（『いにしへ』に似てそれより小さく、正黒で光沢が有り、漆のようである。又角翅のある虫）ということ、今でいう「こおろぎ」を指すことがわかる。『禮記』には季夏の月（『陰曆六月』）に蟋蟀は壁に居るとあり、『詩經』には「蟋蟀は堂に在り、歳聿に其れ暮れん」とある

の一文が載せられている。道真に限らず当時の詩人達に

とり、詩作の素材として『藝文類聚』『初学記』などの「類書」の利用は、常識化しており、換言すれば、ある詩題で詩を詠む時は、まず「類書」に見える同じ題の内容をくまなく探し求めたと想像されることへの言及は小島憲之氏をはじめとして先学より頻りに指摘される所である。ここでも道真が「蜚」という語を使うにあたり、この『藝文類聚』の一文を踏まえている事は十分考えられる。その中でも『詩経』の一文に注目する必要がある。この『詩経』の一文は「唐風」の「蟋蟀」の中で最初の一、二句に使われている部分からの引用である。その原文と訓読文を次に挙げてみる。

蟋蟀

蟋蟀ししゅうつ

蟋蟀在堂

歲聿其莫

蟋蟀堂に在り 歳に其れ莫れん

今我不樂

日月其除

今我 樂ますんば 日月其れ除らん

無已大康

職思其居

已だ大に康む無かれ 職として其の居を思へ

好樂無荒

良士瞿瞿

樂を好むも荒むも無かれ 良士は瞿瞿

蟋蟀在堂

歲聿其逝

蟋蟀堂に在り 歳に其れ逝かん

今我不樂

日月其邁

今我樂ますんば 日月其れ邁かん

無已大康

職思其外

已だ大に康む無かれ 職として其の外を思へ

好樂無荒

良士蹶蹶

樂を好むも荒むも無かれ 良士は蹶蹶

蟋蟀在堂

役車其休

蟋蟀 堂に在り 役車其れ休す

今我不樂

日月其愴

今我樂ますんば 日月其れ愴ざん

無已大康

職思其憂

已だ大に康む無かれ 職として其の憂を思へ

好樂無荒

良士休休

樂を好むも荒むも無かれ 良士は休休

(原文及び訓読は高田眞治著『漢詩大系詩経上』に従う。―線は筆者が付す。)

この詩の中で「蟋蟀」は「蟋蟀 堂に在り」という句で三度繰り返しあらわれる。この詩の内容についての考察は(注二)は本論の意図するものから外れるので割愛するが、道真の六句目の表現は、『詩経』の詩内容の意

図するものを踏まえての撰取ではなく、あくまでも表現技巧のレベルでの撰取に留まっている、いわば断章取義の句作りがなされている箇所としてとらえるべきだと考える。言葉を換えれば、『詩経』そのものにこの句の出典を求めるより「類書」である『藝文類聚』の中にある『詩経』の一文からの引用を通しての句作りを裏付けるものとして考えるべき所だと思う。

更に補足を加えると、この「蟋蟀 堂に在り」の句の説明として高田眞治氏は、

蟋蟀は野に鳴くものであるが、秋の末、冬の初めの頃、寒さが迫ると家の堂中にはいる。堂は土間であるから蟋蟀が外からはいって来て堂に鳴くのである。陰曆九月の候である。〔漢詩大系 詩経上〕 四一九頁)

と言及されている。

又、この『詩経』の漢代の注釈として現存している「毛氏傳」略して「毛傳」あるいは「毛詩」には、「蟋蟀在堂 歲聿其莫」の注として

蟋蟀は蜚なり 九月堂に在り、聿は遂（一）続いて、漸く）なり  
(傍線は筆者加筆) (注三)

とある。道真是『詩経』の詩句のみならずこの詩注の内容も理解した上で「蟋蟀堂に在り」を「枕邊の蜚」として使い、「急に秋深まらんとす」の表現には、『詩経』の「歲・聿・に・其・莫・れ・ん」及び注の「九・月・堂に在り」の内容理解がなされてのそれであることが明らかになる。

以上の事から道真の詩六句目「枕邊の蜚、急にして秋深まらんとす」は、五句目の「梁上の鷄遅くして未だ曉けざるを知る」と対になっており、その発想は白詩の「晚秋夜」に拠りつつも詩語そのものは『詩経』にその出典を求めることのできる事が判明した。

次に八句目の「乘輿來時物外遊」について考察をしてみる。岩波古典文学大系本では「乘輿」が「乘輿」となっており、川口久雄氏は頭注で

たまには車ででかけて俗塵を忘れるのも一興ではないか。輿は車のボディ。車輿の義。

(岩波古典文学大系『菅家文章 菅家後集』二二五頁

頭注八)

と説明されている。この所を内閣文庫本・松平文庫本・蓬左本庫本『菅家文章』にあたると、いずれも「興」が「興」になっている。これを「興」として訓むとこの八句目は次の一文の内容が踏まえられての句作りだと考えられるのである。

『晋書』巻八〇、王徽之傳に

嘗て山陰に居り夜、雪初めて霽れ月色清朗にして四望浩然たり。独り酒を酌み左思の招隱詩を詠ず。忽ち戴逵を憶ふ。逵、時に剡に在り。便ち夜小舟に乗りて之に詣る。宿を経て方に至る。門に造りて前まずして反る。人其の故を問小。徽之曰はく「本もと興に乗じて来たり。興尽きて反る。何ぞ必ずしも安道を見んや」と。(傍線筆者)

とある。つまりこの故事は晋の王徽之(字は子猷)が山陰にいたころ雪の晴れた月明の夜、ふと剡にいる戴逵(安道)に会いたくなって、小舟に乗って訪ねて行ったが門前まで行くと興が尽きたといつて会わずにひき返し

たという話(注四)で『蒙求』(巻上)にも「子猷尋戴」という標題で載せられている話である。

この道真の八句目の表現にこの故事が踏まえられていると考えれば、前の七句目「弊宅の眠臥安なることになきにあらざれども」(「自分の家の方がぐすりねむれるのはねむれるのだが」)を受けて八句目で「興に乗りて来りし時より物外に遊ぶ」(「敢えて弘文院に泊まっているのは」王徽之の故事ではないが、急に興がわいてそれに乗じて俗事の外に身をおいて一時を思いのまま楽しんでゐるからなのである)の句意が自然に読み手に伝わってくるのである。故に「興」は「興」と改めるべき所であると思う。

三

以上、道真の「秋夜、宿弘文院」の詩句の中で特に五句と六句目、七句と八句目に重点を置いて考察してみたが表現の発想を白詩に求めていることは肯首できるものの、その白詩からの摂取は、断章取義的な表面的なもの

に限られていることが明らかになった。その一方で「類書」等の利用を通して白詩以外の漢籍、ここでは『詩経』や『晉書』などの一文からの撰取も同時に行なわれているのである。当時の漢詩人達が詩作に於ける素材、発想をどのようなものに求めていたのか、その一端が窺える作品であつたと思う。

#### 四

次に『菅家文章』巻四に所載の「春詞二首」を取り上げてみる。

##### 春詞二首

282 和風料理遍周遊 和風料理ひて遍く周遊す

山樹紅開水緑流 山樹紅に開き 水緑に流る

自古人言春可樂 古より人は言へらく 春は樂しむべしと

何因我意凜於秋 何に因りてか 我が意の秋よりも凜たる

283 雨後江邊草染來 雨の後 江の邊 草染來れり

遥思去歲始花梅 遙に思ふ 去にし歲始めて花ざし梅を  
歸鴻若當家門過 歸らむ鴻の 若し家の門に當りて過ぎなば  
爲報春眉結不開 爲に報げよ 春の眉の結れて開けずと

\* 作品番号・本文・訓みともに岩波古典文学大系本に従う。

この道真の二詩と関わりのあると思われる白詩は「潯陽春三首」と題される連作中のものである。三首いずれも白居易が江州司馬として異郷の地で春を迎え、送る心情を主題に句作りしている作品である。ここでは道真の詩と関わりの深いと思われる「春生」「春來」の二首を取り挙げてみる。(注五)

潯陽春三首 元和十二年作

\*1020 春生

春生何處聞周遊 春生して 何れの處にか聞に周遊する

海角天涯遍始休 海角 天涯 遍くして始めて休す

先遣和風報消息 先づ 和風をして 消息を報せしめ  
續教啼鳥說來由 續いて啼鳥をして來由を説かしむ  
展張草色長河畔 草色を展張す 長河の畔

點綴花房小樹頭 花房を點綴す 小樹の頭

若到故園應覓我 若し故園に到らば 應に我を覓むべし  
爲傳淪落在江州 爲に傳へよ 淪落して江州に在りと

\*1021 春來

春來觸動故鄉情 春來つて 觸動す 故郷の情

忽見風光憶兩京 忽ち風光を見て 兩京を憶ふ

金谷踏花香騎入 金谷 花を踏んで 香騎入り

曲江碾草鉤車行 曲江 草を碾つて 鉤車行く

誰家淙酒歡連夜 誰が家が 淙酒 歡 夜を連ね

何處紅樓睡失明 何れの處か 紅樓 睡 明を失ふ

獨有不眠不醉客 獨り 眠らず 醉はざるの客有り

經春冷坐古湓城 春を經るまで冷坐す 古湓城

判的研究』の綜合作品表の分類番号に従う。本文は那波本『白氏文集』に従い、訓みは新釈漢文大系『白氏文集四』に従う。

この白詩は元和十二年、白居易四十六歳の時、江州で詠作されたものである。（花房英樹著『白氏文集の批判的研究』、『白居易研究』より）一方、道真の詩は仁和五年、道真四十五歳の時、讃岐の地で詠作されたものである。（岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』菅原道真年表より）二氏の作品の詠作が、いずれも異郷の地でなされている点で詠作事情に類似を指摘することができ

る。  
ここで作品内容の比較に移ってみる。両詩の関わりについては既に金子彦二郎氏より、道真の詩と白詩三首中の「春生」についての指摘がある。（注六）両詩中の同語句を・印、類似語句を△印で図式すると次のようになる。

\*『白氏文集』の作品番号は花房英樹著『白氏文集の批

『白氏文集』 『菅家文章』



1020 春生

春詞二首

春生何處闌周遊

282 和風料理遍周遊

海角天涯遍始林

山樹紅開水綠流

先遣和風報消息

自古人言春可樂

續教啼鳥說來由

何因我意凜於秋

展帳草色長河畔

點綴花房小樹頭

283 雨後江邊草染來

若到故園應覓我

遙思去歲始花梅

爲傳淪落在江州

歸鴻若當家門過

爲報春眉結不開

語句の類似に限ってみると、道真の詩二首は白詩「春生」との関わりの極めて強いことがわかる。道真がこの白詩に拠っていることは詩題の類似の点からも明らかであると思う。

次に句作りの発想の類似としてまず白詩「春生」の七八句目と道真の二八三の詩の第三、四句目を指摘することができ。

道真の詩の第三、四句「歸鴻若當家門過／爲報春眉結

不開」の直接の典拠は『漢書』の蘇武傳の次の故事と思われる。

（漢書、蘇武傳）昭帝即位數年、匈奴與漢和親、漢求武等、匈奴詭言、武死、云云、常惠教漢使者謂單于言、天子射上林中得雁足有係帛書、言武等在其澤中、使者大喜、如惠語以讓單于、視左右而驚謝漢使曰、武等實在。

又、この故事は「類書」である『藝文類聚』の鳥部の「鴈」の頁には、

史記曰、蘇武匈奴中、昭帝遣使通和、武思歸、乃夜見漢使、教使謂單于曰、天子射上林中、得鴈、足有係帛書、言武等在其澤中、使者如其言、單于大驚、乃使武還

とある。

いずれにしても道真がこの故事を踏まえている事は疑う余地もないが、この句作りの発想そのものは、「春生」

の第七、八句「若到故園鴈覓我／爲傳淪落在江州」に

拠るものと考えたい。この白詩の句意は「春よ、若し私の故郷に到って私を尋ねることがあったら、私にかわって、自分は落ちぶれて江州にいと伝えておくれ」となり、道真の詩の句意は「もし歸る鴻が京都の私の家に立ち寄るならば、私にかわって讃岐にいる自分の眉は愁いのため閉ざされたままでであると伝えておくれ」となる。白詩では「春」を擬人化して故郷へ自分の消息を伝えて欲しいとしているのに対し、道真の詩では『漢書』の故事を踏まえ「鴻」を擬人化し、故郷へ自分の状況を伝えたいとする表現箇所である。そこには「春」と「鴻」という行為の主体の相違はあっても、発想は全く同一だと看做して大過ないと思う。故に、この道真の第三、四句の発想は白詩に拠ったものと結論付けたい。

更に道真の詩二八二の第三、四句「自古人言春可樂／何因我意凜於秋」に注目してみる。三句目の「自古人言春可樂」の注として川口久雄氏は

「春可樂」は夏侯湛に「春可樂賦」がある。ここの

「古人言」とはこれを指す。

（岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』補注

六三九頁）

と述べられている。

さて、ここでも中国の類書『藝文類聚』をひもとくと、「春」の部の賦の所に川口氏の指摘されている夏侯湛の「春可樂」と王廙の「春可樂」の二つが挙げられている。（注七）道真の三句目の「自古人言春可樂」の出典の考察としてこの川口氏の指摘されている賦からの投影に疑問をはさむだけの明確な根拠は見出せないが、前掲の白詩「春來」に目を移すと、はるかに詩内容に於いて投影関係を具体的に指摘できるように思うのである。その点について以下詳述してみる。

ここで白詩の意は「春が来ると私は望郷の念に駆られ、忽とあたりを見ただけでも、長安・洛陽の金谷園では、落花を踏んで花見の華やかな騎馬が乗り入れているのであろうし、長安の曲江では、草を引きつづいて飾り立てた車が行き交っているであろう。美酒を酌んで夜中までも歓楽を尽くす者もいれば、紅楼で未明まで騒ぎ、暁を

忘れて眠りこける者もいるであろう。ところが私だけは、江州にあって眠ることもできず、酔うこともできないまま、春の期間中一人ぼつんと寂しく江州の古城に坐りこんでいるだけである。」（新釈漢文大系『白氏文集四』二三〜二四頁の「通釈」を引用）となるようだが、三句目の「金谷踏花香騎入」から六句目の「何處紅樓睡失明」までの詩内容は、以前白居易の居た長安、洛陽の春を楽しむ様子の回想である。そこには勿論、白居易自身の体験が込められているのは言うまでもない。しかも三句目の「金谷」の語には石崇の金谷園詩序にある故事の次の内容が暗に込められているのは自明である。

〔石崇、金谷園詩序〕余以元康六年、從太僕卿、出爲使持節・監青徐緒軍事・征虜將軍、有別廬在河陽縣界金谷澗中、有清泉茂林、衆果竹柏、藥草之屬、其爲娛目歡心之物備矣、時征西大將軍祭酒王詡當還長安、余與衆賢共送、往澗中、晝夜遊宴、屢遷其坐、或登高臨下、或列坐水濱、時琴笙筑合載車中、道路並作、及

住令與鼓吹遞奏、遂各賦詩以敘中懷、或不能力者罰酒三斗。

又、四句目の「曲江」の語には『旧唐書』德宗紀に記されている、

貞元六年二月戊辰朔、百僚會宴於曲江上賦中和節、羣臣賜宴七韻

の一文、つまり唐の貞元六年（西暦七九〇年）二月朔日、百僚を曲江に会して賜わった宴の故事が踏まえられているのではないかと考えられ、更にはそれ以降、「唐代においては、春其の年の進士試験に及第した者に曲江で賜った宴」（『大漢和辞典』五卷九五四頁）を指すようになる」と説明されている事から、白居易の進士及第という晴れやかな実体験もこの「曲江宴」に込められていよう。

これらの故事を踏まえつつ、春を満喫する長安・洛陽風流人の姿と対比させ今の自分の置かれている境遇、つまり江州司馬として一人寂しく春を迎えている姿を一層鮮明に浮きぼりにする詩内容になっている。この白詩を道真の二八二の詩内容に重ね合わせた時「自古人言春可

樂」に込められているものは、白詩の中でいう三句目から六句目の詩句内容と同質のものではないかと推測されるし、又白詩の詩語の中に「金谷酒数」の晉の石崇の故事が込められていることを道真は一早く見抜いていたはずである。

そして四句目の「何因我意凜於秋」の句意である「私の心は春を心行くまで楽しむといったものとは程遠く秋の気より身にしてみても寒々としているのはどうしてだろうか」を白詩の一、二句目「春來觸動故郷情／勿見風光憶兩京」と七、八句目「獨有不眠不醉客／經春冷坐古湓城」とを重ねて読むと、道真の心情が明らかに読み手に伝わってくるのである。白詩にいう二句目の「兩京」を「京都」に置きかえ八句目の「古湓城」を「讃岐」に換置すると白詩の中でいう心情がそのまま道真に相通じるのであるまいか。

更に道真の詩に目を転じてみると「283春詞」の一、二句目「雨後江邊草染來／遙思去歲始花梅」の詩内容にもこの白詩の一、二句目「春來觸動故郷情／忽見風光憶兩京」からの投影を強く感じるのである。道真はこの詩の

作られた二年前、秋暇を乞うて帰京しており、京都の自邸で越年し、翌年の春讃岐に帰任したようである。讃岐守になって二年を経ずしての一時帰京を行っているのである。（岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』解説より抜粋）故に、「遙思去歲始花梅」の一句が昨年の京都と今の讃岐の地での春の風景と対比され、その心情が白詩の一、二句目の内容と重なるのである。

以上、白詩と道真の詩との内容面での投影関係を再度図式化してみると次のようになる。

（『白氏文集』）

（『菅家文章』）

潯陽春三首

1020  
春生

春生何處闌周遊

海角天涯遍始休

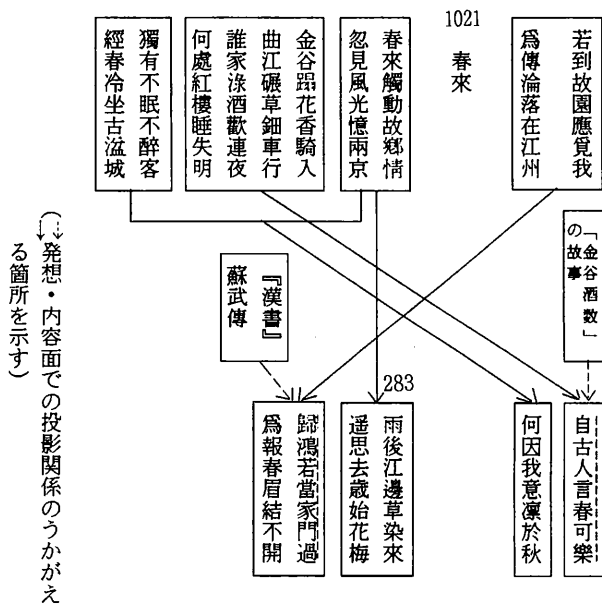
先遣和風報消息

續教啼鳥說來由

春詞 二首

展張草色長河畔  
點綴花房小樹頭

282 和風料理遍周遊  
山樹紅開水綠流



## 五

以上の事から道真の「春詞二首」には、詩語の撰取という点では先に述べたように白詩の「1020 春生」からの投影を指摘しなければならない。一方、発想・内容での類似という点では、図式したように白詩「1021 春來」からの深い投影関係を指摘することができる。特に前述の道真の詩二八二の第三句目の「自古人言春可樂」の出典の考察としては、川口久雄氏の指摘されているもののみならず、雑多の詩文にあたり、慎重に論及すべき所であろうが、今は白詩に絞り一つの提起にとどめておく。

確かに、川口久雄氏の指摘されている夏侯湛の「春可來賦」は『藝文類聚』の「春」の部におさめられている。故に道真に限らずこの時代の詩人達がこうした類書を詩作の一助にしたであろうことは先学指摘の通りである。道真の場合も、詩題が「春詞」であるから、類書の「春」の部等にも目を通したであろうと想像できる。そういった点では川口久雄氏の指摘をしりぞけるだけの根拠は見

出せない。ところが、白詩との比較を通してこの道真の詩句内容を再吟味してみると「古人」の言う「春を樂しむべし」の意はもっと幅のある、含みのある詩語ではないかと思えてくる。少なくとも、道真が「春可樂」と表現しているものが、「春可樂賦」を指すといった、直接的、一義的な詩語の使い方をしている箇所だと看做すのは無理があるように思う。勿論白詩「1021春樂」の第三句「金谷花を踏んで香騎入り」から第六句「何れの處か紅樓、睡、明を失ふ」の詩内容をそのまま「古より人は言へらく 春は樂しむべしと」にかえて句作りをしていると断定するのも早急すぎる気がする。ただ道真の次の第四句「何に因りてか 我が意の秋よりも凜たる」の句意とのつながりから考えると、この発想は白詩「1021春來」からの投影を抜きにしては考えられないのではあるまいか。

故にこの道真の「春詞二首」は白詩「1020春生」「1021春來」二首の詩語、詩句の内容両面からの巧妙な撰取より成り立つ作品であると結論付けたいと思う。単なる詩語のみの撰取に留まらず、発想そのものを白詩に学んでい

る点で前述の「秋夜、宿弘文院」とは異なる白詩からの深い投影を窺うことのできる作品と看做せるのである。

注一 『藝文類聚下』一六八八頁、中華書局

注二 詩序・集伝ともに、この詩を民俗の農に勤めて、しかも「憂へ深く思ひ遠く」して「先聖堯の遺風」のあることを叙べたものとする。但し詩序は、晉の僖公（三代目の君、名は司徒、西周末に当たる）を刺るとし鄭箋にも「我」を僖公を指すとなし、僖公が礼を用いて節となして国中の政令を思わねばならぬの意味とするが、こだわり過ぎた解釈である。詩中には、刺るとか、儉にして礼にして中らずとかの意味は見えない。この詩は後世詩人の田園樂の如きものである。しかも、怠惰逸樂に陥らず、勤儉先憂するところは、まことに有道君子の心に恥じない。堯の遺風と言うのも、もっともなことである。この詩を唐風の首に挙げたのは、唐堯の旧俗が是くの如くであったとするのである

う。(高田眞治著『漢詩大系 詩經上』 四二二頁)

注三 富山房刊『漢文大系十二 毛詩・尚書』毛詩卷

第六 一頁の一文を筆者試験。

注四 『中国学芸大事典』 近藤春雄著

三三二頁より抜粋。

注五 「潯陽春三首」の三首目「潯春去」の本文と訓み

は次の通りである。

1022 春去 春去る

一從澤畔爲遷客 一たび澤畔に遷客と爲りし從り

兩度江頭送暮春 兩度 江頭に 暮春を送る

白髮更添今日鬢 白髮 更に添ふ 今日の鬢

青衫不改去年身 青衫改めず 去年の身

百川未有迴流水 百川 未だ迴流の水有らず

一老終無却少人 一老 終に却少の人無し

四十六時三月盡 四十六の時 三月盡

送春爭得不殷勤 春を送る 争でか殷勤ならざるを得ん

(新釈漢文大系『白氏文集四』二十五頁より抜粋)

注六 金子彦二郎著『平安時代文學と白氏文集―道眞の

文學研究篇第二冊―』

三五四頁

注七 晉夏侯湛春可樂曰、春可樂兮、樂東作之良時、嘉

新田之啓業、悅中疇之發苗、桑冉冉以奮條、麥遂

遂以揚秀、澤苗翳渚、原卉耀阜、春可樂兮、樂崇

陸之可娛、登夷岡以迴眺、超矯駕乎山隅、綴雜華

以爲蓋、集繁蕤以飾裳、散風衣之馥氣、納戢懷之

潛芳、鸚交交以弄音、翠翹翹以輕翔、招君子以偕

樂、攜淑人以微行。

晉王廣春可樂曰、春可樂兮、樂孟月之初陽、冰泮

渙以微流、土冒櫛而解剛、野喧卉以揮綠、山葱蒨

以皎蒼。

(中華書局版『藝文類聚 上』歲時上春 四十五

頁より抜粋)

岩波古典文学大系『菅家文草』の本文と他本とを校合するにあたり、熊本大学の金原理先生より内閣文庫本・松平文庫本・蓬左文庫本『菅家文草』をお貸しいただき、稿を草することが出来ました事に深く感謝申し上げます。

(やきやま・ひろし 大学院第7回修了 有明高専)